

光のへや

大佐町アートプロジェクトから

井 上 明 彦

芸術的に意図された写真より、単なる記録写真やストレートな事実の記録の方が、予期せぬ刺激的な細部に富んでいることは珍しくない。ふとしたディテールに瞬間の凝固などといった言葉に回収されえない生き生きしい写真のノエマ《それは=かつて=あった》⁽¹⁾が現前する。中国山地の深奥、岡山県大佐町で、町民の方々から提供された約800枚の古い写真を前にしたとき、私が味わったのはこのことであった。半世紀前の集合写真のなかで一人ぶれた少女の顔は永遠に揺れ続けており、触れ合った手は今も離れない。劣化した表面に浮かぶ、今ではほとんどありえない数多の子供たちの笑顔の輝きや、山野の労働の後ではにかむ軍服姿の少年たちの身振りは、アルバムを繰る者をめくるめく光の井戸に誘い込む。それは、私の体験しえなかった遠い過去の光に、私自身が照らされるような体験である。

高梁川の源流に位置する大佐町は、人口4057人、世帯数1184戸、その6割以上が農業を営む土地で、高齢化と過疎化が進むなか、地域づくりの新しいヴィジョンが求められている。このアートプロジェクトは、1999年に同町にオープンした奥備中風土記館の設計者・丹羽英喜氏の推薦により、梅田和男町長が岡山市在住の美術家・小野和則氏（1941～）に依嘱したものであった。当初は、同館の壁を飾る作品制作と展示指導を求められただけだが、小野氏は、全町民に呼びかけて過去百年間の写真を集め、それをもとに作品を制作するとともに、今後も写真を継続的に収集してデジタル化し、文化遺産としてアーカイブをつくっていくという構想にまで展開し、町の賛同を得た。それはまた、「作品」や「文化財」の形成のあり方を実践的に問い合わせ直すことでもあった。2000年春に予算がついて公的にスタートし、一件の民家がレジデンスアトリエとして用意された。写真収集と資料化には同町源流振興課があたった。私は、小野氏からの協力依頼により、写真をもとにした作品制作と広報物のデザインを受け持った⁽²⁾。

奥備中風土記館は、廃墟化していた巨大な木造の牛舎（同町は大佐牛の産地でもある）を丹羽氏が改築し、展示施設としたものである。高さ7.2m、長さ51mのヴォリュームをもつ躯体を集成材とポリカ波板の自立した被膜でそっくり包み、既存トラスや柱列のリズムをそのまま生かして、ローコストの制約をデザイン上の可能性へと転化している。スリット状に空けられた外被の隙間から光がたえず差し込み、中央部分に宙づりにされた階段がこの長大な空間を二つに分節している。未完ともいえる木造空間の開放感とスケール感は、都会の展示施設には見られないものである。われわれの課題は、この空間に大佐町の過ぎ去った日々の光の記憶をよみがえらせることであった。

展示は空間をそのまま二分し、小野和則氏は、戦前の小学校の記念写真や原爆の写真などをコラージュした平面作品と古い柱時計を組み合わせた作品を制作し、大佐町の歴史と20世紀の人類史を重ね合わせた。

私は、建物の半分を占める吹抜け部分に、半透過性の光沢のある布による蚊帳状の直方体を浮かせ、内側から2台のビデオプロジェクターで映像を投影、内側と外側両方で映像を見ることのできる「光のへや」をつくった。「へや」の天井は黄色のネット状の布を張って2階からの光を取り込み、床には黒のカーペットを敷いた。横のスペースは外光をさえぎるために青いニット布で壁をつくり、長さ15mの「水のみち」と題した通路を構成した。映像は、コンピュータにより写真の細部をスキャンして120シーンを選び、8秒+クロス効果4秒のゆっくりしたシークエンスでシンプルにつないでムービー化した。

オープニングの夜、宙づりの階段がはじめて観客席として使われた。町の人々が自らの過去の時間をのぞき込むように「光のへや」に見る光景は、時間の厚みを持った建築空間に映像を含む美術作品を関係づけることの意味と可能性を考えるいい機会となった。

「今まで保存・再生というと古い民家や文化財のように建築的に価値ある建物がほとんどであったが、今後産業施設や倉庫・学校等のどこにでもある普通の建物が役目を終わり、別の用途に再利用されるケースが増える。再生にあたり、時の刻んだ風化を建物を豊かにする自然の〈仕上げ〉として考え、その地域で暮らす人々の生活の記憶とともに大切にし、よみがえらせる必要があるだろう」と丹羽英喜氏は述べる⁽³⁾。このプロジェクトは展覧会をやって終わりというわけではない。町の人々との協同作業の中で、ローカルな日常の光の記憶を普遍的価値として再生する方法を探っていくのはこれからである。建築、美術、デザインのジャンルを越えて、「再生」というテーマは、21世紀芸術の重要な課題になるではないだろうか。

(1)ロラン・バルト『明るい部屋』花輪光訳、みすず書房、1985年、94頁

(2)経緯の概略は、『山陽新聞』2000年10月20日文化面にも記載されている。

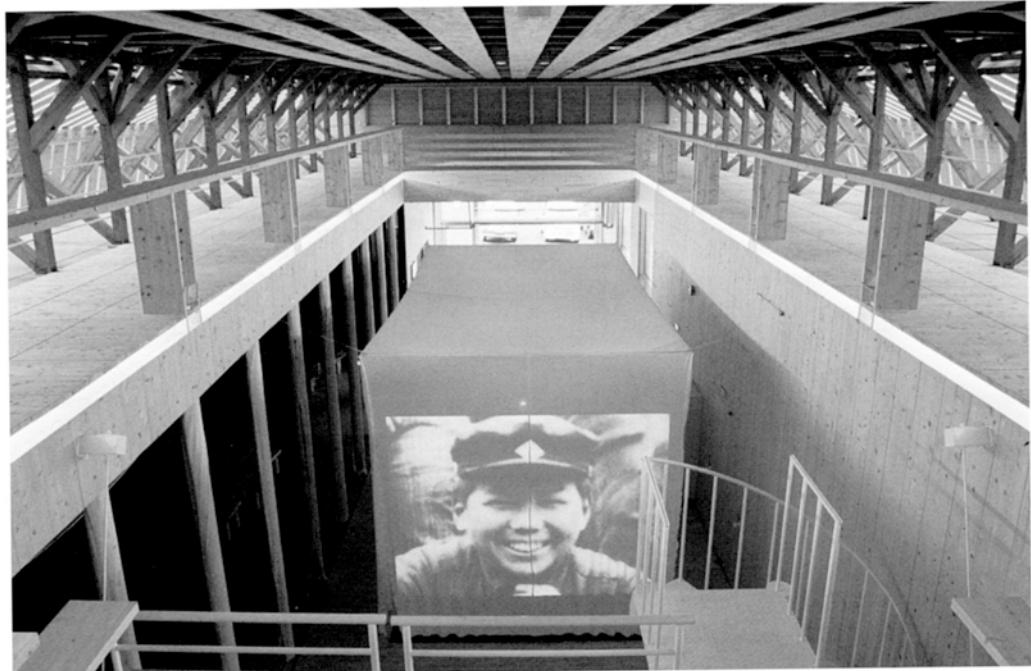
(3)『住宅建築』1999年10月、70頁



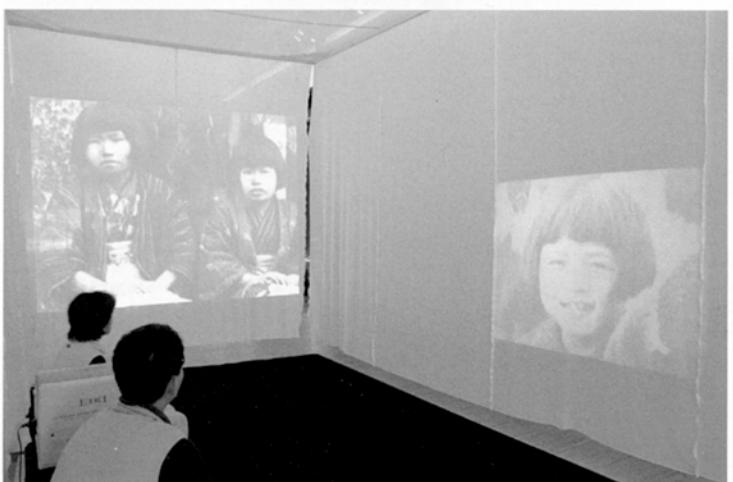
奥備中風土記館（設計：丹羽英喜）



風土記館内部。右壁面に小野和則氏作品、奥に「光のへや」



井上明彦
「光のへや」
布、木、ビデオプロジェクタ
ー 2台ほか
300cm×300cm×600cm
「大佐町光の記憶」展
2000年10月23日～11月4日
奥備中風土記館
岡山県阿哲郡大佐町



「光のへや」内部